



横幹プロジェクト - 横幹連合と横幹技術協議会の協力事業 -

江尻 正員*1・矢川 元基*2

「横断型科学技術」を将来に向けた日本の基幹科学技術と位置づけ、異分野の知の結集と、それによる新しい知の創造を強力に推し進めている二つの組織がある。その一つが横幹連合（横断型基幹科学技術研究団体連合）であり、44の学会から構成された学界での連合組織である。もう一つは横幹技術協議会（横断型基幹科学技術推進協議会）であり、幾つかの有力企業から構成された産業界での連合組織である。

この二つの組織は、横断型科学技術の開拓・振興・発展・応用を目指し、ともに車の両輪として多様な活動を展開してきている。横幹連合にとっての横幹技術協議会は、新鮮な企業ニーズの源泉であると同時に、新しく創造される横断型科学技術の実践の場として、横幹連合の学術活動を陰に陽に支えてくれている。

一方、横幹技術協議会にとっての横幹連合は、新産業や新ソリューションを生み出すための産学連携の新しい枠組みを構築し、それによって産業力の強化を推進する際の知の源泉という位置付けにある。

今までに横幹技術協議会と横幹連合とは、連携して定例的な「横幹技術フォーラム」を開催し、横幹技術協議会のメンバー企業だけでなく、広く一般企業にも参加を呼びかけ、産業界のさまざまな課題について議論を深めてきた。昨年度に開催されたフォーラムのテーマには、下記のようなものがあつた。

- リスク環境下での事業意思決定技術
- 感性工学が拓く新時代の商品
- 安全安心システム実現への挑戦
- サプライチェーン革新による競争力の向上

これらの横幹技術フォーラムでは、横幹連合からも講師やパネリストとして参画し、産業界の課題を、産業界の技術者と一体となって考えてきた。時代の進展とともに産業界のニーズや関心も常に変動しつつあるので、それに対応して今後も引き続き魅力的なフォーラムを開催するよう、協力して企画を進めているところである。

横幹技術協議会と横幹連合とが協力して実施しているもう一つの施策に、「横幹プロジェクト」がある。これは産業界が抱える解決困難な課題を、横幹連合傘下の

各学会が協力して解決しようとするものである。まず、企業が課題を横幹技術協議会の産学連携委員会の場に提示し、委員会はその課題にもっとも適した研究機関・研究者を横幹連合の人材データベースの中から選定する。そして一緒になってフィージビリティ・スタディを行い、解決に向けた道筋の見通しが得られた段階でプロジェクト化へと進む。この段階で、計画の主体が横幹技術協議会から横幹連合へと移管され、以後の契約とプロジェクト運営・管理の責任が横幹連合に替わる。

このように横幹プロジェクトは、特定の企業から提案された特有の課題について多方面から議論を深め、解決に導こうとするもので、それには、企業と複数の大学が分担協力して実行する共同研究型と、企業が複数の大学に委託する委託研究型とがある。ともに研究機関が複数にわたるところが、従来のプロジェクト形態とは大きく異なる。最近では、一つの研究機関だけでは解決が難しい課題が必然的に多くなってきているので、そういう難題について、衆知を集めて解決しようとする新しい産学連携プロジェクトの枠組みを与えるものである。

一般にこのようなプロジェクトを起こす場合、研究の取り決めを行う「契約業務」が煩雑になることが多い。現状では、各大学とも独自の契約方式を持つため、企業から見た場合、それぞれの方式に合わせ大学ごとに個別に対応するのがかなりの負担になっている。そのため横幹連合が仲立ちをし、まず企業と横幹連合が契約を行い、さらに横幹連合が、独自の契約方式で複数の大学との間での契約を一括して行うこととし、そのためのプロジェクト事業規約や独自の契約書式を整備した。今までに、産業界から提起された三つの課題に対してそれぞれプロジェクトが進行してきたが、このたび、四つ目のプロジェクトとして、この一括契約形式による初めての委託研究が成約を見て、現在研究が進行中である。

いずれのプロジェクトも、文系・理系にわたる異なった分野の研究者の知恵を結集する必要があるものであり、プロジェクトの性格上、守秘義務がきちんと守られていて、許される時期が来るまではテーマ・内容・企業名など、すべてを伏せている。課題が複雑・困難で、一企業や一研究機関だけでは解決できないもの、とくに人文科学、社会科学の考察を必要とする分野横断型の課題の解決には打って付けの制度といえよう。今後の各企業からの積極的なご提案を期待しているところである。

*1 横幹連合 副会長

*2 横幹技術協議会 副会長